

東アジアから袋中の琉球言説を読む

小 峯 和 明

I 袋中の経歴

袋中（一五五二―一六三九年）は浄土宗の学僧で、弁蓮社、袋中良定という。磐城（福島県いわき市）の出身で、藩が改易にあつて出奔後、琉球に三年間滞在したことで知られる。年譜で示しておこう。

一六〇二年、厳島の光明院で兄以八に会う（『舊林拾葉抄』識語）。

一六〇三―〇六年、琉球滞留。帰国後、『琉球神道記』『琉球往来』執筆。

帰還前に中国の冊封使・夏子陽渡来（『使琉球録』）。

一六〇八年、山崎大念寺で『琉球神道記』完成。『琉球往来』もこの前後か？

一六〇九年、薩摩藩、琉球侵略。

一六一一年、京都三条の檀王法林寺に。関東に護送される尚寧王と再会。

一六二四年、『南北二京霊地集』撰述。その他、『寤寐集』『題額聖闡賛』『梵漢対映集』『説法明眼論端書』『当麻曼荼羅白記』

『仏本行略経』『天竺往生験記』等々、著述多し。

一六三九年、袋中没、八十八歳。

一六四八年、『琉球神道記』慶安版刊行。

ことに薩摩藩による琉球侵略前夜の古琉球の面影を伝える『琉球神道記』『琉球往来』の二著は評価が高い。前者は琉球側でも古琉球を知る第一級資料に遇される。しかし、琉球帰還後の袋中の人生は四十年もの長きにわたり、その間の著述はおびただしいものがあり、まだ研究は充分進んでいない。将来は『袋中全集』の結集が必要であろう。

袋中関係の資料は、横山重『琉球神道記』角川書店版（一九七〇年復刊、初版・大岡山書店、一九三六年）の労作につきている。以下の大半はこれによるが、引用の際の付訓は省略。但、『琉球往来』は島村幸一「袋中『琉球往来』の研究」（池宮正治・小峯和明編、二〇一〇年）の岩瀬文庫本の翻刻により、『琉球国由来記』は角川書店版による。

以下、『琉球神道記』『琉球往来』を中心に東アジアの観点からみていきたい。

II 『琉球神道記』の世界

まず『琉球神道記』は自筆稿本が現存し、慶安版本とは微妙な相違もある。自筆稿本の序を引用しよう。

南閩浮提陽谷、輪王所化下、琉球国者、雖為海中小嶋、而神明權迹之地也。国土安穩而、災厲不起。四時調適而、不曾見奏凋之相。殆可謂仙所。（略）

金銀珠玉ハ無陶冶満尊。綾羅錦繡ハ不擣染余桁。甘蔗盛瓶、淨茗収壺。書籍筆硯、絵替团扇、随意随取。都テ唐山・倭国・朝鮮・南蛮之商客之所致也。是併和光之恩惠者乎哉。(略)

竊據其詞、恣注同塵之德。且備帰国不忘、号曰琉球神道記。分爲五卷。総而爲知器界之濫觴、挙四洲爲第一卷。雖神祇通諸邦、各有表裏。竺土仏国、震旦王国也。故今彰其一而、釈竺土爲第二。挙震旦爲第三。次挙当国諸伽藍本尊、詮垂迹之本地、以爲第四。後正挙此神祇爲第五矣。今旅敵無一冊書、不能閱、唯写愚蒙暗記而、爲佐助釣鐏以倭仮字、骨節齟齬、蓋此故也。儻漏而入他眎者、羞慚之甚也。于時、大明万曆三十三年龍集乙巳四月之望日也。(一六〇五年)

琉球は海中の小嶋とはいえ、「神明権迹之地」で国土安穩、「仙所」とも目され、金銀、綾羅錦繡、甘蔗、書籍筆硯、团扇等々、物が豊饒にあふれかえる理想郷であり、それは「唐山・倭国・朝鮮・南蛮之商客」によるのだとする。まさに東アジアの海洋交易国家としての琉球の地政学が象徴化されている。全体の構成も示され、巻一・四洲、巻二・天竺、巻三・震旦、巻四・琉球伽藍本尊、巻五・琉球神祇となる。世界全体から東アジアへ、琉球の宗教、寺院や本地の仏から神祇へ、という展開である。

この序文から三年後の自筆稿本の奥書は、

此一冊有草案、自南蛮帰朝平戸、至中国、於石州湯津薬師堂初之。上洛之路中、船中而書之、於山崎大念寺終之。集者 袋中良定 花押 慶長十三年十二月初六云爾 (一六〇八年)

とあり、序文が琉球の明の冊封体制下による中国年号であるのに対し、奥書は和年号となっている。時あたかも薩摩の侵略の前年に当たる。草稿は琉球から戻って平戸を経由して山陰の岩見の湯津薬師堂で起稿されたという。湯津は温泉とともに岩見銀山も近く、交易の良港として栄え

た。薬師堂も現存するが、袋中とのつながりは不明である。そして上京の途次、船中でも書かれ、山崎の大念寺で完成したという。まさに旅における旅の筆録でもあった。

また、慶安版の刊記は以下の通り。袋中没後の九年後である。

慶安元孟冬仲旬二条通玉屋町村上平楽寺 開版 (一六四八年)

『琉球神道記』は従来、古琉球を知る資料として主に巻五だけが対象とされてきたが、それだけではテキスト全体を読んだことにならない。あらためてその全体像が問われるであろう。筑土鈴寛・横山重の先駆的な研究を受けた、近年の渡辺匡一、原克昭らによる袋中の資料群の見直し、たとえば『題額聖闡賛』などを鍵とする関連研究によって、あらためてその全体像をとらえかえす気運が開けてきたといえる。渡辺匡一「蛇神キンマモン——浄土僧袋中の見た琉球の神々」(渡辺・一九九八年)によれば、「琉球が「釈迦一仏ノ国土」であることを確認」「袋中は、自らの思い描く仏国「琉球」を立ち現すべく、蛇神キンマモンに向かい合う」「幻想の中の「仏国」ともいふべき「琉球」の姿をとらえようとしたとする。巻一から全体の関連づけが試みられるが、その追究はまだ充分極められたとはいえない。

すでにその一端にふれたことがあるが、再度、巻一から巻三までの展開を俯瞰しておこう。まず巻一は「三界事」として、仏教神話や宇宙観からなり、須弥山、三界、天竺開闢、転輪聖王、四劫などが叙述される。『俱舍論』、『悉曇藏』、『釈迦譜』、『涅槃経』、『楞嚴経』などの典拠があげられる。ついで巻二は、天竺史がたどられ、仏統と王統、転輪聖王、仏伝などが続く。

- | | | | |
|---|-------|-----------|-------------|
| 1 | 過去七仏事 | 七仏 | 釈迦譜 |
| 2 | 釈迦八相事 | 仏伝 私云・涅槃経 | 釈迦譜、賢愚経、大権経 |

3	釈迦如来昔縁事	雪山童子	涅槃経
4	仏生国事	仏国、二仏	
5	転輪聖王事	頂生	大集経
6	仏囀殊勝事	龍王 私云・(法然伝)	西域記

すでに前稿でふれているので、ここでは割愛するが、天竺神話、宇宙観、仏伝などの琉球における意義は、有名な琉球Ⅱ龍宮説をはじめ、那覇の語源を「阿那婆達多龍王」と結びつけたり、海洋国家としての龍宮世界の見立てばかりではなく、経蔵としての龍宮や梵字の起源としての龍宮など天竺世界を根拠や背景にする発想と実は緊密に結びついている。おのずと天竺神話と琉球神話とが共鳴しているのである。ことにキンマモン(君真物)などの琉球固有の神名や歌謡のおもろ、ハブよけの呪文などを梵字で書くことも対応しているだろう。琉球音を表記するのに、仮名ではなく、梵字にしたところに、もともと『梵漢対映集』など梵字の悉曇字にも関心を持っていた袋中ならではの創意がみられるし、何より仏法の龍宮世界とのかかわりの深さからおのずと導き出されるものであったろう。

そして、琉球の蛇身キンマモンを龍と見立てることで天竺世界の龍と合致させ、仏法の守護神としての龍神、すなわち仏菩薩とつらなる権者神へ転移させるところに『琉球神道記』の眼目があった。卷二の天竺世界でしばしばみられる龍をめぐる言説や説話が表現の構造として連関しあっていたことを見のがせないだろう。

一方、卷三は震旦史で、中国の地勢にはじまり、神話から明までの歴史がたどられる。一覧で示しておこう。

(序) 地勢

1	盤古王事	天地開闢
2	歷代王位事	十二代
3	三皇事	女媧 私云・須弥四域経
4	五帝事	堯舜 莊子
5	十四代事	記載ナシ
6	夏禹事	九疇八卦 桀 禹王伝、書伝大全
7	殷湯事	妲己、九尾狐 私云・殺生石 注千字文、糸竹才覚草、釈書、碧岩
8	周武王事	伯夷叔斉、彭祖、越王勾踐・呉王扶差 清浄法行経、頑石賦
9	秦始皇帝事	占書、趙高
10	漢高祖事	鴻門の会、仏法伝来 胡曾詩、注千字文
11	魏文帝事	此代五主、合四十五年
12	晋武帝事	竹林七賢
13	宋武帝事	八主、合五十九年
14	齐高帝事	達磨
15	梁武帝事	宝誌、惠思
16	陳高祖事	四主、合三十九年
17	隋文帝事	五主、合四十八年
18	唐高祖事	玄奘、楊貴妃、武帝排仏 私云・流離太子 仏祖統紀
19	宋太祖事	十四主、合二百四十六年
20	大元太祖事	九主、合百六十二年
21	大明太祖事	太祖以来今ニ至マデ十三主、合二百三十七年即此万曆三十三年也。

これも前稿で略述したが、過去のご事としての中国世界が焦点にあり、現実的な社会への認識は薄い。それは何より宋元明への記述がきわめて簡単なことにあらわされている。天地開闢、盤古神話から当代の明まで通史的な配列はなされてはいるが、近現代史の記述はほとんどみられない。故事、言い換えれば物語としての震旦史に終始し、仏法伝来史に關してもふれることがない。冊封・朝貢体制の現実を投影するような琉球との交流に關しても全くといってよいほど言及がない。しかし、逆にみれば、宋元明を立項しただけでもまだ現代史への視界をみせてはいるといえるのかもしれない。袋中が琉球に渡る頃にはすでに明は疲弊しており、袋中が当代の中国をどう見ていたのかは分からない。

記述が最も多いのは、8「周武王事」、ついで10「漢高祖事」。7「殷湯事」も多いが、九尾狐の説話であり、後半は關連する日本の『玉藻』や中国『碧巖録』の破竈墮和尚の話題になる。また、18「唐高祖事」は、後半は天竺の流離太子の仏法迫害の話で、袋中の叙述の連想展開のありようがよくうかがえる。引用書では、偽經として知られる『清淨法行經』や幼学書系の『胡曾詩』、『注千字文』などもみられる。

以上のようにみると、天竺・震旦・日本という伝統的な三国觀に依拠しつつ、その日本を琉球にすり替えて、あらたに提示されたのが袋中の琉球三国觀にほかならない。日本と琉球が入れ替わっただけの世界觀であり、すり替えられた日本はしばしば「私云」で對比される「倭」の世界に厳然と存在する。「私云」による相対化もまた、発想の主体や起点が常に日本にあることの再提示である。既定の三国觀を援用しつつ日本が琉球をも取り込めた世界觀を確立する前提ともなったといえようか。もとより袋中がそのことを意識していたかどうかは別問題であり、結果として琉球の仏国土の確立を追究ないし追認する過程でそのような世界觀に向かつていった、という言説の自律的展開の次元である。

また、袋中が叙述の端々にみせる現実的な琉球認識に關しては、これもすでにくり返し指摘している通りで、以下の四点があげられる。

- ①又我旅邸ノ隣家ニ信士アリ。春ノ中、語テ云、「唐船来ルニハ先タテ香アリ」。夏ノ中、語云、「奇哉、唐船ノ香アリ」ト。果シテ匂ヲ過テ、欽差船来ル。日ヲ数レバ、彼出船ノ比ナリ。尚寧王封王ノ時ナリ。此人総ジテ、言バ微ニ至ル。余事アリ略ス。(卷五・30)
- ②又、我住セシ内ニ、大ナル落書アリ。王者・諸官ヲ毀ル。是ヲ顯ニ力ナシ。弁岳ニ、二七日日、詣シテ、諸官一同ニ折ル。日滿テ自託ノ人アリシ。其ノ類遠島セラル。尚寧王ノ時ナリ。(卷五・19)
- ③又見ルニ、世俗、履ヲ着ズ、簑笠ヲ用ザルコト、密以ハ是国初也。故ニ人形モ大也。髮鬚モ多シ。惣ジテ物ニ工ナシ。心口朴也。内証神慮カト見ユ。或秘書ニ(麗氣十卷アリ)、左手ハ定ナレバ、是ヲ天道ニ名ク。右手ハ恵ナレバ人道。左足ハ鬼也。右足ハ畜也。諸神多クハ、鬼畜也ト云。可惜、此末變ジテ、宮室ヲ美麗シ、衣服ニ文シ、舟車ヲ飾ラン。拙キ智恵ニ誇リ、空キ勇兵ヲ好マバ、恐ラクハ衰微ノ相ナルベシ。三皇枝ニ栖、鵜草葺不合世コソ恋ケレ。(卷五・27)
- ④又、予、折ヲ得レバ、中山府ニ至。又有時、山々ノ景氣、浦々ノ眺望ニ臨テ、止ンコトナクシテ卑懷ヲ吐。瀟湘ノ題ヲ飯テ八首ヲ呈ス。只是、一時ノ慰也。亦、慚愧ヲ忘テ此ニ書ス。(卷五・32)

以下、①は冊封使船到来をめぐる予見譚で、夏子陽『使琉球録』によれば、一六〇六年五月であり、袋中がこれに遭遇したことは確実である。叙述全体の語りの現在にかかわる。②は王や諸官を批判した落書をめぐる事件で、政情不安を直截に示す。薩摩との緊張が背後にあることはま

ちがないだろう。③は華美な風俗を批判するもので、琉球衰微の予見「空シキ勇兵」という表現に、薩摩の侵略との関連を読み取ることもできるであろう。④は巻末にみる瀟湘八景になぞらえた幻想の琉球八景。序文の「名中山府。景該於八、隅離于三」に対応する。後年の葛飾北斎の琉球八景につながるが内容は異なる。『中山伝信録』など冊封使録にもこの種の八景はみられる。「一時ノ慰」や「慚愧」が何を意味するかは不明だが、あるいは薩摩侵略への感慨と関連するだろうか。

Ⅲ 『琉球往来』と東アジア

ついで『琉球往来』をみよう。これも以前ふれたように、『琉球神道記』と全く対照的な歩みをみせる。同じ頃、同じ著者によって書かれたはずだが、『琉球神道記』は自筆本が残り、公刊もされたのに反し、『琉球往来』はなぜか埋もれてしまう。袋中の伝記には、『琉球神道記』と並んで書名はつとにみられるが、テキストそのものが一般の目にふれることはなかったのである。

写本の本奥書にいう、「慶長八年癸卯当大明万曆三十一年頃、琉球国三年在留内、依那覇港馬氏高明所請作之」とあり、『琉球神道記』と同じ一六〇三年であるが、その後の識語には、以下のように書かれる。

文化六己巳年十二月、於京師得之藏 伴信友。

一八〇九年十二月に京都で幕末の国学者として名高い伴信友が手に入れたというもので、今日伝わる写本の大半はこの識語をとまうから、信友識語本以前はほとんど知られていなかったとみてよい。信友が発見するまで、実に二百年間も埋もれてしまったのであり、さらに近代に入っても本書が省みられることはなく、横山重『琉球神道記』（大岡山書店、一九三六年）で翻刻紹介されるまで不遇は続くのである。したがって、沖縄に本書が伝わったのも横山本以降とみてよい。近年、池宮正治・島

村幸一によって、本格的な書誌、伝本研究や解題、注釈研究がなされるようになった（小峯・池宮編、二〇一〇年）。実に数奇な運命をたどったといえる。

以下、東アジアの交流に関する部分を摘記しておこう。

まず日本との関係では、すでに着目されているように、「連歌一会」「当世連歌式目、古今、万葉、伊勢物語、新古今集、至千載集」（上1）などの古典や連歌、「立華事」「汲池坊清波」「堺茶名人」（上2）、「宇治、梅尾」「熊茶、相良、宮内、茶千台、栗野神生茶」（上6）などの立花、茶の湯など当代の文化が投影されている。ここでは省略するが、立花や茶の湯に関しては、琉球側の資料からも裏付けることができる。

あるいは、中国に関しては、砂糖や蜜が「震旦到来」（上5）、書籍についても「毛詩、尚書、礼記、周易、左伝」の五経、「公羊伝、穀梁伝」を加えた七経、「周礼、義礼」の九経。「論語、孝経」の十一経に「老子、莊子」の十三経が明示され、「今日着岸唐人、長講談」とある。中国の居留地でもあった久米村の天妃殿の学校のことも出てくる。「此国振古、大国有進貢。雖為澆季、此式不可怠」と中国とのかかわりの深さが強調される（上7）。別に「二倫行実一帖」「右新渡之書籍」（上15）などもみえる。

なかでも有名な条が以下の例である。

来歳、大明之勅使来降、奉庶幾者也。因茲武具御尋候歟。我祖祢雖有其畜、至于愚身、油断失墜。無念之至候。当座纔所残者、重藤、塗籠、縷裏之弓、五百張、加弦了。（略）銃大小二百挺、尚銃子硝薬、当一一前。（上12）

「大明之勅使」とは、冊封使のことで、直接には袋中滞在時の夏子陽のことをさすのだろう。さらには武器・武具の調達にふれ、「張良兵法、頼義相伝之訓閲」「近代以天賦書一卷」などの兵法書にも言及する。薩

摩との緊張関係を意識した一節とみることができよう。夏子陽の『使琉球録』には、日本と琉球との緊張関係がしばしば記載されている。

また、「渡唐船職事、然遣唐船時先送表」「造船者任材木出所、大嶋可申付候」と、唐船仕立てを奄美から調達する例などもみえる（上11）。同じ条には、伽藍の補修や僧徒の供物にふれ、「涅槃会供備菜、浴水洗湯料、盂蘭盆百味五菜、二季彼岸盛物、仏名会奠供事」等々、仏事の年中行事も説かれる。琉球王国の往事、このような仏事も国家的な行事として儀礼が行われていたことをしのばせる。国家レベルにとどまり、一般に浸透しなかったために残存しなかったと考えられる。涅槃会でいえば、『琉球国由来記』にこれも有名な図像例がある。

『琉球国由来記』卷十一「波上山護国寺」11「画幅」

釈尊涅槃像毫幅 両界二幅 但、前住持、頼慶和尚為私物。大清順治十八年辛丑九月日、奏公朝、為伽藍公物。俗伝、朝鮮国画師云。

（一六五五年）

八相八幅 頼昌法印住職之時、奏公朝、調達之也。日本洛陽画師也。

熊野権現縁起三卷 于時文明九年丁酉二月二十一日、博多信心大施主茂家、三司官浦襲大臣、池城大臣、沢子大臣、座主有厳。

（一四七七年）

嘉靖四十一年壬戌季夏大吉祥日

（一五六二年）

波の上権現の護国寺に十七世紀の涅槃図や両界曼荼羅図があり、八幅の仏伝の八相図もあったという。涅槃図は朝鮮、八相図は京都で作られ、さらに十五世紀の「熊野権現縁起」三巻もあり、博多の茂家と三司官、住持の宥厳らの寄進によるという。文明年間の絵巻とすればかなり古いもので、残念ながらもとり現存しないが着目に値する。東アジアの交流をしのばせる作例の数々であり、涅槃図や八相図は、涅槃会や灌仏会などの行事の際に披露され、絵解きなども行われたに相違ない。

また、「爾当秋中、依進貢渡船、入唐一見之旨候」として、天竺から中国（摩騰、法蘭）、日本へ（善無畏、達磨、菩提仏哲）、中国から天竺（法顕、玄奘）、日本へ、あるいは日本から中国（最澄、空海、荣西、道玄、重源）へ、さらには天竺へ渡ろうとした僧（真如法親王、三井慶祚）の名前も列挙される（下16）。

ついで、「烟草事」（下25）では、

右出自南蛮国、入諸国、賓客饗応之興也。剂用細、烟筒專掃除。或為毒、或為藥。人有寒暑、禁好可依氣。本草不見、好惡難定、唯一座一薰而、為談笑具者也。（漳州↓宗波先生）

と、本草書にみえない南蛮渡来の煙草のことにもふれる。これに対して、『琉球国由来記』卷三29「煙草」では、

当国、万曆年中、從薩州帶來、始栽之者歟。倭国、「慶長十年二、始テ日本ニ渡ル」ト云フ。「其後、諸人はヲ賞飲ス。タバコトハ、和訓ニアラス。漳州府志、蓬溪類説ニ淡婆姑ト称ス。本草洞詮第九二云、煙草、一名ハ相思草。（略）

のように、日本とのかかわりで説かれる。万曆は袋中の時代であり、慶長十年はちょうど『琉球神道記』の序文の年記の時点に相当する。『琉球往来』では本草書にないというが、『琉球国由来記』では「本草洞詮」なる資料が引用される。

以上、片々たるものではあるが、琉球を軸にした東アジアの交流をしのばせる具体例の数々であり、すべてが往来物特有の偽作性をともなうとはいえず、全くの想像や創作ではありえないであろう。現実的なものをふまえるからこそ読者と表現世界を共有できるわけで、袋中の体験や見聞をふまえて仮構された往来物としてもっと読み込まれるべきテキストである。

IV 『寤寐集』の夢記から

『琉球神道記』『琉球往来』以外に袋中の書き残したのものにも、琉球や東アジアにかかわる記事が散見する。夢の記である『寤寐集』はなかでも注目される。琉球に渡る前後であろうか、薩摩の周行の際、梶木の政所別当の佐渡介が念仏の信者だったが、乱心したのを袋中が十念を授け、治療する話題（8）、あるいは九州周行で善導寺貞把が古墳の火災を消すのに観経を使う話題（28）などがあり、薩摩や九州の話がみえるのも目を引く。

琉球に関しては二例みえる。

9 琉球ニ馬光明ト云人、我ニ親シシ。其孫生レテ以来、鳴コトナシ。乳ヲ飲計ナリ。惣ジテ無生ノ様ナリ。ヤガテ死セント悲マル。頻ニ我ヲ頼故ニ、一夜行テ、身ニ文ヲ書、又文ヲ守ニス。其朝ヲ待テ鳴出タリトテ喜ブ。其末ハ文ニ。

34 先ニ琉球国ニシテ、夢ニ、我広野ヲ行ク。竹林ニ堂アリ。中尊ハ摺本ノ大日ノ曼荼羅、脇ハ弘法大師、聖法導師也。拝シテ帰ントスルニ、大師右ノ手ヲ挙テ、物ヲ言、即衣ノ袖ヲ切テ我ニ給フ。我感ジテ泣帰ル。林ヲ出テ見レバ、墨染ノ衣ノ一幅半ヲ切テ三角ナリ。我高声ニ感啼ト思テ覺。良忠ノ本地ナド、今思合テ、此夢ヲ次グ。其先種々アリ。

後者は琉球滞在時に見た夢で、広野の竹林の堂内で大日の曼荼羅図の脇の弘法大師像が右手をあげて何か言い、衣の袖を切つて与えた、林を出ると墨染めの衣が三角に切れていたという。琉球の地とは特に関連性がないが、一方の前者は琉球の友人馬光明の孫が泣かなかったのを護符

を書いてやったところ泣き出したというもの。馬光明（幸明、高明とも）の名は『琉球神道記』版本の序にもみえる。

爾ニ有国士彼国三位馬幸明ト云人、語我云、「吾雖神国、昔ヨリ未有其伝記。願ハ記之」。

云、「我ハ他邦ナリ。何ゾ知国事」。明云、「我粗聞ク、所不記、問知人」。請コト頻ナリ。故ニ諾ス。

呢懇の關係にあつた馬幸明の要請で書いたというこの部分は、『琉球神道記』成立の直接的な契機にかかわるもので、なぜ自筆稿本になく、版本だけにあるのか、明らかではない。版本刊行時には袋中はすでに故人であるから、版本公刊時ではなく、もっと前の段階で加筆された自筆本があつたことになり、現存稿本は加筆前の段階か、あるいはすでにあつたこの部分を削除したかのいずれかであろう。一方、書名の明示の前の「且備帰国不忘」という一節は、稿本にあつて版本にはみられない。いかにも旅の途次で書いた臨場感を思わせるくだりであり、刊本ではもはやそのリアリティが薄れたということであろうか。

いずれにしても、馬幸明の要請は本書形成の契機としてあり、種々の知識情報が幸明から袋中にもたらされた可能性を示している。はたして袋中は完成した写本を馬幸明に送つたのであろうか。刊本序の馬幸明の要請明記はテキストが琉球に届くのを意識して記載された可能性があるのではないだろうか。

『寤寐集』は袋中と幸明の關係の深さを示し、『琉球神道記』刊本序の幸明の存在感を裏付けるものとなっている。また、『琉球往来』本奥書にも「那覇港馬氏高明」とみえる。馬幸明は双方のテキストの成立の機縁をなした人物ではあるが、琉球側の資料からは人物を特定できない。『琉球神道記』刊本序の「国士、彼国三位」に照らしても明らかではない。儀間真常だとの説もあるが、決め手を欠いている。

宝曆十三年（一七六三）三月二十四日、弥陀堂入仏の節の早筆書写という如来寺本『袋中上人伝』識語にも、

袋中上人琉球国主黄冠馬幸明ヨリ御持参茶碗一ツ、七賢人横物一幅。袋中上人五十五歳時入唐。慶長九年、岩岡邑丞兵衛上人の跡留也。とある。馬幸明からもらった茶碗や竹林の七賢人を描いた横長の軸物などがあつたという。『寤寐集』はその親密な交遊を知りうる例として貴重である。

さらに、『寤寐集』で特に注目されるのは、ルソンに渡つたという記載である。

10 魯宋ニテ着岸ノ時、其国ヨリ海中ノ船ヲ責ト云。又海中ヨリ国ヲ攻ト云テ大ニ乱ス。敵御方サハギ乱ル。我、船中ノ人々ニ告云、「事有マジ」、頻リニ静ム。其ノ如ク雜説ニシテ、明日ハ一和ス。我見ヤウハ、達磨知死期ナリ。人皆感ズ。

この記述をめぐって、袋中がルソンまで行ったか行かなかったか、議論があるが、ほかにルソン行きの消息を伝える資料はみられない。ルソン関係は下記の袋中伝系の文言をみるだけである。

『飯岡西方寺開山記』

此年入唐ノ望有テ、郷里ヲ去テ西海道ニ趣テ、商沽便船ヲ伺、漢土ノ着岸ヲ志ザスト雖ドモ、彼国東夷ヲ畏テ、堅ク旅船ヲ入レズ。故呂宋南蛮遠流ヲ凌ギ、風ニ依テ琉球ニ至ルニ、彼コノ人崇敬シテ、請ジテ桂林寺ニ住セシメ、一国挙テ知徳ト称シテ、化ニ随ハザルモナシ。是以、国士黄冠彼国三位 馬幸明ト云モノ、神書ヲ望。此ノ時旅敵ナレバ、一冊ノ書ナシ。故ニ頻ニ之ヲ辞ス。余レドモ、懇ニ請ル記ヲ加ヘ、佐助スルニ和ト仮名トヲ以綴、五巻ヲ作テ、琉球神記ト名。間訛謬アルハ請書ノ故ナリ。又日本庭訓往来文ヲ乞フ。是

以、児童ノ為、琉球往来一卷ヲ著ハス。

『袋中上人伝』

上人五十二歳の時、入唐の望ありて、帝幾を出て西海におもむき、商沽の便船を待て唐土に渡らんと期す。（略）叔折節、便船のありければ、先琉球に渡り給ひぬ。呂宋南蛮の商船を頼むといへども、彼国の人は日本を東夷なりとをそれて、かたく拒みて乗せず。時に琉球の国主、黄冠馬幸明、上人の徳風をあふぎ、帰仰する事深し。これにて、上人を城外の桂林寺に安住せしめて、四事の供養備前足して欠くことなし。黄冠の懇請によりて、琉球神道記、並琉球往来記を製作し給ふ。しかるに上人、入唐の本意遂がたくおほしければ、数々帰錫を催し給へども、かの国の縑素わりなくとどめて、別離をゆるさざりければ、三年までは桂林寺に住持し給へり。

これらによれば、双方でルソンの扱いに微妙な差異がみられる。前者の『西方寺開山記』では、中国行きを志したが、着岸を認められず、ルソン南蛮の途次に風によつて琉球に着いたとなり、後者の『袋中上人伝』では、琉球にまず着いてから、ルソン南蛮の商船に乗りうとしたがはたせなかった、とする。中国が日本を「東夷」として恐れたというのは、袋中の渡琉の五年前、秀吉の朝鮮侵略によつて明が朝鮮に援軍を送り、結果として明も被害をこうむり疲弊したことをふまえるのであろうか。後者の『袋中伝』の方が理にかなった説明と思われるが真偽の程は定かではない。

いずれにしても、これら袋中伝記にルソンのことが出てくるのは、先の『寤寐集』にしか根拠はないであろう。そこであらためて『寤寐集』の本文をみると、「魯宋ニテ着岸ノ時」とあり、上陸とは書いていないことに気づく。船が着岸の際、船から陸を攻める、いや陸から船を攻め

るという噂が飛び交い、騒ぎになるが、袋中が事は起きないと説得し、はたして翌日何もなかった、達磨は死期をわきまえるのだと言い、皆感嘆した、という。要するに自讃談になっている。

これが実際の出来事かどうかは確認できないが、仮にルソンまで行ったとしても上陸したわけではなく、寄港しただけとみなせそうである。琉球から明行きをめざしてルソンまで流れていったのか、琉球に行く前にルソンにまで船が行ったことなのか、いずれにも解釈でき、決め手はない。ことに夢の記を主体とする『寤寐集』に書かれただけなので、夢の出来事の可能性さえあるだろう。

真栄平房昭論（二〇〇四年）にみるように、この時代、ルソンと日本や琉球との交流があったことは明らかであり、そういう国際情勢や交流を投影したのとして特筆に値することだけはいえそうである。たとえば、『太閤記』巻一六「呂尊より渡る壺之事」にみる、名高い呂宋助左右衛門の壺をめぐる話題などとも響きあうであろう。

泉州堺津菜屋助右衛門と云し町人、小琉球呂尊へ去年夏、相渡り、文禄甲午七月二十日帰朝せしが、其比、堺之代官は、石田木工助にてありし故、奏者として唐の傘、蠟燭千挺、生たる麝香二疋上奉り、御礼申上、則ち真壺五拾、御目に懸しかば、事外御機嫌にて、西之丸の広間に並べつつ、千宗易などにも御相談有て、上中下段々に代を付させられ、札をおし、所望之面々、「誰々によらず執候へ」と被仰出なり。依之、望の人々、西丸に祇候いたし、代付にまかせ、「五六日之内に悉取候て、三つ残しを取て帰侍らん」と、代官の木工助に菜屋申しければ、吉公其旨聞召、其代をつかはし、「取て置候へ」と被仰しかば、金子請取奉りぬ。助右衛門、五六日之内、徳人と成にけり。（新古典大系）

堺の菜屋助右衛門こと、呂宋助左右衛門が文禄年間にルソンから戻つ

て壺を五十も石田三成のもとへ持参し、ことごとく商って富豪となったという。ルソンとの交流が壺に象徴される逸話である。袋中が実際にルソンに行ったかどうかの議論ではなく、「魯宋ニテ着岸ノ時」が話題になるような言説そのものに、当時の国際情勢や異文化交流の姿を見えるべきであろうと考える。

V 琉球と東アジア

上記のような東アジアの交流の姿は、琉球で制作された諸書にもかいまみることができる。たとえば、十八世紀の琉球文化の精粹を集約した『琉球国由来記』には以下のような例がみえる。

①当国、交隣国、何世代始乎、不可考。永楽年間、尚思紹王世代、暹羅国、朝鮮国、蘇門答剌国、滿刺加国、瓜哇国等、為隣交。是始歟。（卷三65「交隣国」）

②時咸淳年間、有禪鑑禪師者。不知何処人。嘗乘一葦輕舟。飄然到小那霸津。俗不称其名。只言補陀洛僧也。蓋朝鮮人歟。且扶桑人歟。世遠。詳無考也。（卷十「琉球国諸寺旧記」）

③原、夫此地者、弘治十五年壬戌之間、自從朝鮮国王、献方冊藏經於吾朝也。始卜此地、創輪藏、以収之也。然而至于万曆三十七己酉、堂亦老朽、經亦散失。而咸成空地矣。（卷十「天徳山円覚寺附法堂」）

7「肇創弁財天女堂記附再修事」

④私聞、吾朝曾航海、屢通諸国也。所以者何哉。抑余聞之耆老云、一為堅国盟、一亦欲財賄足也。就中、世祖尚真王、（略）且度於若干之僧侶也。当此時也、朝鮮国王、亦匪翅布仁政於海内、帰心於仏乘、要使率土浜、皆得窺仏祖之秘謀也。其善利哉也。（略）而弘治十五壬戌之間、朝鮮国王、献方冊藏經於吾朝也。（卷十・同14「方冊

藏経来朝記

①は琉球王国の覇者尚巴志の父思紹の代から各国との交流が盛んになったという起源説であり、さしたる根拠はなく、交流が活発な現在から、もしくは活発だった往事を回顧して、その始原を見定めようとしたものである。朝鮮、シャム、サマダラ、馬拉カ、ジャワ等々、アジアの国々が組上に載せられ、『歴代宝案』などでも検証されており、実際の交流ともあわせた、幻想の異文化交流の縮図でもあろう。

②は琉球に漂着した禅鑑禪師という僧が琉球にたどりつく、日本人とも朝鮮人ともいわれる。正体不明の得体の知れない僧形の人々はいちように補陀落僧と呼ばれる。まさにマレピトであり、葦に乗って渡海する達磨のイメージ（『釈氏源流』他）が祖型にあるだろう。日本か朝鮮かという識別法におのずと琉球との位置関係が表れている。

③は朝鮮との交流における一切経の寄贈であり、外交史上著名な例である。経蔵としての弁天堂の盛衰が説かれる。現在も首里城の龍潭にある堂で、もともと経蔵であった。大蔵経の件は『朝鮮王朝実録』からも確認できる。世祖八年正月条（一四六二年）に、「正官僧円咩鞍子一面、成道記、法華経、金剛経、翻訳名義、証道歌」云々とみえ、同様の記事は、世祖十三年八月条（一四六七年）などにもある。一切経や漢籍類を朝鮮王が琉球の使者に寄贈するもので、外交上の重要な媒体であったことを示す。以下、『朝鮮王朝実録』から朝鮮と琉球に関連する条を摘記しておこう（『朝鮮王朝実録琉球史料集成』による）。

(1)世祖八年二月（一四六二年）、臣抛琉球国図問、「自貴国至日本所経島名、及国内頭地名」。其答説、与図無異。但云、「自朝鮮発向琉球国、則従日本西辺、向東南去」。此言与図各異。臣更抛図問、「我

前聞従日本西辺、向西南去」。答曰、「向西南去、則江南路也」。臣抛図問、「扶桑、瀛州、羅刹国、大身、大漢、勃楚、三仏斎、黒齒、渤海、尾渠等国所在処」。答曰、「吾未曾聞見、但吾国石面、書刻瀛州。（略）」、命進齋来天竺酒。

(2)世祖十三年七月（一四六七年）、待宴、正使以天竺酒進。上曰、「汝君使汝等、以輪誠款、多致礼物、予甚嘉悦、今予為汝君、起座飲此酒」。因問曰、「酒名天竺者何」。答曰、「此酒出於天竺国、故名之」。上曰、「天竺国在何方、汝国道路相距幾何、且汝国人常往来不」。对曰、「天竺在南方極遠、与我国未得相通、但至其境上」。宴罷、上謂宗宰曰、「此非天竺酒也、天竺酒固不如是、彼豈料我之知其非天竺酒也。必自多欺我矣」。

(3)宣祖二十五年六月（一五九二年）、秀吉貽書我国、使之整其軍馬、与日本合動、直犯上国、我国拳義斥絶。即於其年四月、因聖節使金応南之行、具由奏聞、中朝先因許儀後亦聞倭謀、令我国要結暹羅、琉球等国、合兵征勦。

(4)宣祖三十年四月（一五九七年）、自前天朝亦多論議。或言、失朝鮮得日本、如矢弓得弓、或謂如琉球、安南等国、則不必救、朝鮮為遼左藩籬。

(5)光海君二年四月二十日（一六〇一年）、鄭邦慶、帰自日本、供云、「丁酉之乱、被虜於智異山下、入薩摩州、上年五月、島主人攻琉球、俘其王而來、又遣兵数千。量其田土」云。

(6)同・十二月二十六日、晋州僧六恵、自对馬出来、（略）因渡海、削髮為僧、住在宝江寺。今始出来、日本事情、則在薩州時、聞原秀忠往襲琉球国、虜王及弟来、送于家康之際、国王弟路死、唯国王往繫于賊都矣。

(1)は世祖の臣下が琉球の使者と琉球国図をめぐる航路についてやりとりし、さらに周辺の諸国をめぐる質問する内容で、地図と実際の感覚や知識とのずれや差異が問題になっている。渤海などすでに滅んだ国や実際には存在の曖昧なものまで含まれるから、イメージマップにも近いものが混在していたであろう。最後に「天竺酒」が出てくるが、次の(2)で、世祖と使者とでこの「天竺酒」をめぐるやりとりがみられる。世祖が酒の由来を尋ね、使者が天竺伝来と応えるや、天竺との往来や場所を問いただし、使者がはるかに南方の遠い地でその境くらいまでしか行っていないと応え、宴が終わってから天竺酒は二セモノだ、自分をだまそうとしていると世祖が宰相に伝えたという。アジアの異文化交流の姿が浮かび上がってきて興味深い、この天竺酒とは泡盛であろう。

(3)は秀吉の朝鮮侵略をめぐるもので、まず明が秀吉の侵略を知って、朝鮮とシヤムや琉球を含む連合軍を構想し、日本包囲網を作ろうとしていたことがうかがえる。(4)は明にとつて、朝鮮が最も重要で、琉球や安南(ベトナム)は二の次として軽視される、というもので、これも中国と朝鮮との地続きの関連の深さを示している。地政学の典型例といえる。(5)、(6)は薩摩の琉球侵略をめぐる記事で、前者(5)は鄭邦慶が朝鮮半島南部の著名な智異山で秀吉軍の捕虜になり、薩摩に護送され、そこで薩摩の琉球侵略を知り、翌年帰還してその情報を語ったというもの。王が捕虜となり、数千の兵を送り、検地をしたことなどがふれられる。後者(6)も、対馬から戻った晋州の僧が薩摩にいる時にやはり琉球侵略を知り、王が家康の所まで護送され、王の弟は途次に亡くなることなどを伝える。侵略の担い手が原秀忠とされるのも、「薩琉軍記」などにみられず、目を引く。

いずれも秀吉の朝鮮侵略時に捕虜になったり拉致された人々が薩摩に渡り、その見聞を帰還してから伝えたというもので、秀吉の朝鮮侵略と

薩摩の琉球侵略が連動していることをよく示している。

このようにみれば、薩摩や日本と琉球、という一対一対応の見方とはまた違う視界がひらけてくる。薩摩の琉球侵略は東アジア全体にとつても少なからぬ意味をもっており、秀吉の朝鮮侵略とあわせ、中国の冊封体制への動揺として、明清交替ともかわり、東アジアのあらたな時代の展開を引き起こしていくのである。そのような情勢の前後に琉球を訪れ、その世界を後世に伝えた袋中の言説はあらためて重い意義を担っているともみることができよう。袋中の述作はたんに古琉球最後の光芒の刻印にとどまらず、東アジア全体から、今後さらに見直され、読み直されるべき対象であろう。

◆参考文献

渡辺匡一「蛇神キンマモン——浄土僧袋中の見た琉球の神々」『文学』

季刊・岩波書店、一九九八年夏号

同 「如来寺松峯文庫蔵『三語集』について——浄土宗名越派の説草集」『説話文学研究』37号、二〇〇二年

同 「袋中の本箱」『説話文学研究』38号、二〇〇三年

同 「涅槃像考文抄」『涅槃像一座談』翻刻と紹介(その一)『信州大学人文学部人文科学論集(文化コミュニケーション学科編)』40号、二〇〇六年

同 「涅槃像考文抄」『涅槃像一座談』翻刻と紹介(その二)『信州大学人文学部人文科学論集(文化コミュニケーション学科編)』42号、二〇〇八年

原 克昭「『琉球神道記』試探——『題額聖圖賛』との関聯からみた袋中の言説世界」『説話文学研究』38号、二〇〇三年

同 「袋中の『琉球神道記』と『琉球往来』——渡琉僧のまなざし」

『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇六年十月

小峯和明 「琉球神道記の世界」『仏教文学』17号、一九九三年

同 「袋中上人と琉球——『琉球神道記』と『琉球往来』の世界」

『袋中フォーラム実施報告書——来琉四〇〇年・その歴史的意義を考える』首里城友の会、二〇〇五年

同 「『琉球神道記』の龍宮世界」『立教大学日本文学』96号、二〇〇六年

同 「袋中『琉球神道記』を読み直す——読まれざる巻一から巻三まで」『日語学習与研究』163、北京・中国日語教学研究会、二〇一二年

真栄平房昭 「近世初期のルソン交流史を探る——周縁領域の視点から」

鹿児島純心女子大学国際文化研究センター編『新薩摩学——薩摩・奄美・琉球』南方新社、二〇〇四年

池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編『朝鮮王朝実録琉球史料集成』榕樹書林、二〇〇五年

池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学』三弥井書店、二〇一〇年

信ヶ原雅文・石川登志雄『檀王法林寺袋中上人 琉球と京都の架け橋』

淡交社、二〇一一年

河宇鳳他『朝鮮と琉球——歴史の深淵を探る』榕樹書林、二〇一一年

関 周一『朝鮮人のみた中世日本』吉川弘文館、二〇一三年

張 源哲「朝鮮与琉球文学交流之一隅——以漢詩交流為中心」王宝平編『東亜視域中的漢文学研究』上海古籍出版社、二〇一三年

島村幸一編『琉球 交叉する歴史と文化』勉強出版、二〇一四年

(本学名誉教授)